

現代日本における移民の編入様式

——家族・ジェンダー・市場——

大阪大学 高谷幸

1 目的

この報告の目的は、現代日本における移民の編入様式について考察することである。A. ポルテスらは、アメリカにおける移民を念頭に、エスニシティごとに異なる編入プロセスを説明する枠組みとして編入様式論を提起した (Portes and Böröcz 1989; Portes and Rumbaut 1996=2014)。このとき、労働市場、受け入れ国の移民政策、受け入れ社会の態度、エスニック・コミュニティ等が、移民の編入を規定する条件としてあげられた。しかし、この条件は、アメリカ社会を念頭においたものであり、移民の受け入れを公式には認めていない日本の場合、異なる編入様式をとると考えられる。またポルテスの枠組みでは、ジェンダーによる差異はまったく考慮されていないが、実際の編入プロセスにおいてジェンダー差を無視することはできない。

2 方法

そこで、1990年代以降の日本における移民の編入様式について考察するために、国勢調査(1990-2010年)のオーダーメイド集計で得たデータをもとに、1990年代以降、滞在人口が増加した中国人、フィリピン人、ブラジル人の男女別の地位変動について分析する。

3 結果

分析の結果、国籍(エスニシティ)、ジェンダーごとに異なる地位の変動がみられた。中国人の場合、男女ともホワイトカラー層が一定数を占める一方で、ブルーカラー層、女性の主婦層の割合も少なくない。これは、留学生、技能実習生や中国帰国者、国際結婚など、在日中国人の入国経緯とその後の社会移動の多様性を反映している。一方、フィリピン人の場合、ジェンダーで大きく異なり、国際結婚の割合が高い女性は、主婦層の割合が高いのに対し、男性は同国籍結婚の割合が高くブルーカラー層の割合が高い。ブラジル人は男女とも同国籍の割合が高くブルーカラー層の割合が高い。

4 結論

以上のように、国籍(エスニシティ)、ジェンダーごとに地位変動が異なるのは、現代日本における移民の編入が、入国管理政策(在留資格)、ジェンダー、家族と市場によって大きく規定されているからである。これは、移民の受け入れを公式には認めてこなかったことの帰結ともいえる。というのも、移民の否認は、移民政策を入国管理政策と同一視し、統合政策の確立を阻んできたからである。この統合政策の欠如は、移民の入国経緯が、その後の社会移動を方向づけることにつながってきた。たとえば地位変動における国籍とジェンダーによる差異は、ある程度入国経緯の違いによって説明できる。また統合政策の欠如によって、入国後の移民の生活は、主流の社会構造に大きく規定される。本報告では、家族と市場の関係に着目し、エスニシティ内部のジェンダーの分岐を説明する。このように、編入の実態の解明を通じて、移民の受け入れを公式に認めないことの帰結を明らかにする。

文献

Portes, Alejandro and József Böröcz, 1989, "Contemporary Immigration: Theoretical Perspectives on Its Determinants and Modes of Incorporation", *The International Migration Review*, 23(3), pp. 606-630.

Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of Immigrant Second Generation*. (=2014, 村井忠政ほか訳『現代アメリカ移民二世世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)